



コラム Column

ふるさとに帰るひとびと

小野 智昭

瀬戸内海の島に行った。何をしに行ったのかというと、もちろん瀬戸内の旨い魚を食べに、ではなく高齢農家の調査に、だ。

農村人口の高齢化問題は深刻だ。若者の流出どころか子づくり世代が不在なために出生が少なく、その上、残っている高齢者が逝って人口数が減る地域が出ている。農業労働力の高齢化もすごい。昭和一桁世代のリタイアは予想以上に進まない。それを引継ぐ者がいないからだ。そこで注目されるのがいわゆる定年帰農だ。しかしその実際は在村のまま、農業主 兼業で非農業主 退職で農業主という比重の変化がほとんどだ。

今回、調査した町はしかしずいぶん違う。島を出て都会で働いた人達が会社を定年退職して、なんと町に戻って来て農業もやっている。正真正銘の「定年帰農」がそこにある。島は屋代島（周防大島）、高齢化が進んだ山口県の中でもトップクラスの高齢化地域。グループはすでに有名な「トンボの会」。Uターン者が組織するこの会は、かつて島から出ていった人達を島に呼び戻し、さらには段々畑でミカンをつくらせている。上は84歳から下は61歳のUターン高齢者集団。その会長と世話役達のパワーはすごかった。

1988年に60人程で発足した会がいまでは130人になっている。会員は農業者限定ではなく、非農業者もOKだ。「農業の」ではない、「地域の」担い手組織たらんとしている。毎年Uターン者がいるから順調に会員が増えているのかと思うと、実はそうでもない。原因は鬼籍に入っただけの脱退だ。まさにショートリリーの担い手達だ。でもそれを次々とつなげていくことに意義がある。

それはいつまで続くのだろうか。「昭和24年生まれまでは戻ってくる。」役員の1人が指摘した。水田での機械化は昭和34年から始まっている、そのとき10歳だった人達は農業経験があるから島に戻って農業をする、だがそれ以降

に生まれた人達は戻らないだろう、というのだ。「昭和34年」が画期かどうか定かではないが、動力耕耘機の普及をメルクマールにしての指摘だろう。将来の帰農可能性のキーは子供時代の就農経験の有無にある、これは自らの経験からする指摘だ。

ではUターン帰農者の子供はどうか。都市で働き家庭をつくった彼らの子供達は、都市で生まれ都市の生活しか知らない。子供世代には就農の経験などない。だからたとえ親達が定年帰農したとしても、その子供達までが将来、就農するなどという可能性は薄い。定年帰農したUターン者の子供達が親の元へ来ればUターンではなくIターンで、彼らの就農があったとしてもそれは帰農ではなく新規参入だ。Uターン農家には再生産の契機がない。

定年帰農者のメリットは何か。「知恵と暇と年金がある」ことだと会長はいう。知識；彼らの前歴は様々で、都会での仕事と生活で得た知識と経験がある。暇；リタイアした身で、家あり年金収入ありで生活に不自由はない。暇を持て余すから農業ができる。そして年金；農業収入を当てにしないどころか、年金や退職金をつぎ込んで農業ができる。三つ目までくると、これを農業者と呼ぶべきかどうか迷ってしまう。しかし非農業所得を農業につぎ込むのは兼業農家の常だろう。農業の担い手云々の問題でなく、農地を守る者、そして地域を担う者の確保こそがむらにとっては重大課題だ。会が会員を農業者だけに限らない意図もここにある。会社勤めは知恵だけでなく厚生年金をも彼らに授けた。おかげで退職後に農業を続けられる。

さて、そんな帰農の前には帰村がなくてはならない。まずは退職者がむらに戻る。都市に建てた家を残してまで、彼らをむらにUターンさせるものは何か。

2日間にわたる盛大な盆踊り。盆正月には戻る息子達が多い。定年者が出ると会の世話役達は彼らを熱心に説得する。むらに戻ろう、むらを担ごう、会に入ろう、と。農家は維持されるか、直系家族は再生産されるかどうか。そんな評論家的な問いになど一瞥もせず、会の世話役達は宗教団体の布教活動か、変人扱いされかねない熱心さで家々を回っている。Uターンがあるから会が存続し、会があるからUターンが続く。そしてむらやいえが残り、ふるさとがあるから他出者が帰る。

彼らをふるさとに帰すものはなにか。振り出しに戻るような疑問は残る。

温暖な気候と美しい景色のふるとは確かにすばらしく、そして魚は旨いのだが。